

まうあを まよせい

Vol.15

rcrc.ryukoku.ac.jp

(発行日)
2022年9月1日

(編集・発行)
龍谷大学 矯正・保護総合センター



2021-2022年の活動を振り返って

龍谷大学
矯正・保護総合センター長 浜井 浩一

矯正・保護総合センター長となって4年目を迎えました。慣例に従い2021年を振り返りつつ、この1年間のセンターの活動についてご報告させていただきます。

当センターは、矯正や更生保護に関する教育実践としての矯正・保護課程と研究としての矯正・保護研究センターを統合し、新たに社会貢献活動を付け加えて2010年に開設されました。

2021年度の教育活動としては、前年度から続く新型コロナウイルスによるパンデミックによって緊急事態宣言が繰り返されるなど矯正・保護課程の講義の多くがオンラインとなりましたが、前年度と同様に、課程講師の皆様の真摯な対応によって大きなトラブルなく講義を実施することができ、総受講者数も1,966人となりました。

また、2021年度は龍谷大学の主催で、当センターの兼任研究員である本学法学部の石塚伸一教授が中心となって2021年6月に国際学会「アジア犯罪学会第12回年次大会」をオンラインで開催しました。大会は、『アジア文化における罪と罰：犯罪学における伝統と進取の精神 (Crime and Punishment under Asian Cultures: Tradition and Innovation in Criminology)』をテーマとして掲げ、「世界で最も犯罪の少ない国」といわれる日本の犯罪・非行対策と社会制度・文化に対する理解を広めることを目指し、当職(センター長)がClosing Plenary Sessionにおいて「安全な国、日本の犯罪学的パラドックス (Paradox of Criminology in a 'safe' country: Case of Japan)」と題して全体講演を行ったほか、多くの兼任研究員・嘱託研究員が研究成果を発表しました。大会には、アジアからだけでなく、欧州、米国、オセアニア等、世界28の国・地域から招待者や関係者を含め250人以上が参加するなど充実した大会となりました。

その他の研究活動についても、前年度からの3年計画の新規・大型事業として團藤文庫資料整理事業が始まり、丸善雄松堂株式会社との業務委託契約によって文庫の整理作業が進んでいます。團藤文庫プロジェクトについては、その成果がNHKからも注目され、現在Eテレにおいて團藤重光先生のド

キュメンタリー番組の制作が進んでいます。刑罰理論研究プロジェクトなどそれ以外のプロジェクトにおいても、コロナ禍でのオンライン研究会等を活発に行いました。実証研究プロジェクトでは、ISR(D) (国際自己申告非行調査) が新たに科学研究費(基盤研究(B))を獲得し、アジア犯罪学会や日本犯罪社会学会のオンライン大会においてテーマセッションを開催するなどその成果を報告しました。

センターでは、教育・研究に加えて社会貢献活動を中心に新たな活動にも挑戦しています。ここでは、そのいくつかを紹介したいと思います。

2021年12月11日には、人数制限やマスクの着用など感染防止策を徹底することで、京都駅前の本学響都ホール校友会館において第11回矯正・保護ネットワーク講演会を開催することができました。講演会では、「生き直す～薬物依存症からの回復～」をテーマに、薬物依存の過去を語り続け、依存症問題の啓発活動に積極的に取り組む俳優の高知東生氏にご講演いただきました。講演に続き、高知氏の回復過程をつぶさに見てきた公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会代表の田中紀子氏にも参加していただき対談形式で依存症からの回復についてお話しいただきました。お二人の軽妙な掛け合いの中で「孤独の病気」とも言われる依存症からの回復において、一人で戦わないこと、周囲からの支えが重要であることなどが浮き彫りになり、参加者アンケートの結果もとても好評でした。

また、2021年度も、社会貢献活動の一環として、当職が、奈良県更生支援のあり方検討会に参加するなど、兼任研究員や嘱託研究員が研究成果の社会実装という観点からさまざまな地方自治体における再犯防止の取り組みにも積極的に協力しました。

2022年度は、少年法改正による特定少年の創設や刑法改正による拘禁刑の創設など、再犯防止に向けた刑事政策の流れが一層加速されることが見込まれます。矯正・保護総合センターにおきましても、これまでの経験を踏まえ、2022年以降は、教育、研究、社会貢献のさらなる充実に努めていきます。引き続きよろしくお願いたします。

センター主催 第11回矯正・保護ネットワーク講演会

2021年12月11日に開催しました第11回矯正・保護ネットワーク講演会では、俳優の高知東生氏を講師としてお迎えし、「生き直す～薬物依存症からの回復～」と題し、ご講演をいただきました。その後、高知氏の回復過程をつぶさに見てきた公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会代表の田中紀子氏とご対談いただきました。今年度も新型コロナウイルス感染予防の観点から定員を150名に限定しました。当日は会場が満席となり、講演会は盛況のうちに終了することができました。

「生き直す～薬物依存症からの回復～」

講演	高知 ^{たかち} 東生 ^{のぼる} 氏 俳優
対談	高知 ^{たかち} 東生 ^{のぼる} 氏 俳優
	田中 ^{たなか} 紀子 ^{のりこ} 氏 公益社団法人 ギャンブル依存症問題を考える会代表

開催日時／2021年12月11日(土) 13時30分～15時00分

開催場所／龍谷大学 響都ホール 校友会館

開催趣旨

龍谷大学は、100年以上に及ぶ浄土真宗本願寺派の宗教教誨を基盤としながら、1977年に刑事政策に特化した教育プログラムとして、矯正課程（現在の矯正・保護課程）を設置しました。それ以来、刑務官や法務教官、保護観察官などの専門職のほか、保護司や篤志面接委員、BBSなどのボランティアの養成に努めて参りました。

また、2001年には、矯正・保護についての学術研究を推進する矯正・保護研究センターを設置しました。この研究センターは、2002年度からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）に採択され、8年間にわたり研究活動を行ってきました。

2010年には、矯正・保護総合センターを開設し、矯正・保護課程の教育活動と研究センターの研究活動との有機的な統合をはかることとしました。さらに、矯正・保護の分野における社会貢献活動も、事業の柱として明確に加えることとしました。その一環として、2011年度から矯正・保護ネットワーク講演会を開催させていただいております。この講演会は、矯正・保護の実務家や関係する行政機関、民間団体、企業家、専門職の方々、地域の方々など、矯正・保護の問題に関心を寄せる多様な人びとに対し、それぞれの思索と相互理解を深めるため、議論・研修の場として提供させていただいております。

今回は、現在も薬物依存の過去を語り続け、依存症問題の啓発活動に積極的に取り組む俳優の高知東生氏と、同氏の回復過程をつぶさに見てきた公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会代表の田中紀子氏をお招きし、「生き直す～薬物依存症からの回復～」をテーマに本講演会を開催することになりました。

この講演会がお集まりいただいた皆さんに実り多いものとなりますよう、心から願っております。

プログラム

- 挨拶・趣旨説明・登壇者紹介
浜井 浩一（龍谷大学矯正・保護総合センター長／同大学法学部教授）
- 講演
講演者 高知東生氏（俳優）
- 対談
登壇者 高知東生氏（俳優）
田中紀子氏（公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会代表）〈進行役を兼ねる〉

後援

京都府、京都市、浄土真宗本願寺派、京都保護観察所、京都府保護司会連合会、京都府更生保護女性連盟、更生保護法人京都府更生保護協会、京都BBS連盟、木津川ダルク、龍谷大学ATA-net研究センター

はじめに ～僕には隠したい過去がありました～

皆さんこんにちは。京都は本当に僕にとって懐かしい場所です。東映の太秦、松竹で（映画やドラマなどの）撮影を一生懸命頑張っていました。でも何をしくじったか、2016年に薬物で逮捕されて、大切な家族、そういったものを失ってしまいました。でもそれから5年が経ち、去年、執行猶予も切れて、これからが本当の意味での自分の人生のリスタートだということで、いろいろな人に支えてもらって、今日があります。

今日は、そんな僕の「何やっとなねん、おまえ」という人生なんですけれども、よろしかったら皆さんと、僕の人生を少し振り返ってみたいと思います。

自分で言うのも恥ずかしいんですけど、傍から見れば有名女優

を妻に持ち、順風満帆にみえたかもしれませんが、実は僕の人生には、たくさん隠したい過去がありました。



講演する高知氏①

小5まで親類に育てられる ～孤独であきらめることが当たり前の幼少期～

僕は物心ついた頃、両親がいないと言われていました。ばあちゃんと、ばあちゃんの息子、長男家族と一緒に住んでいました。家は、いまで言う二世帯住宅みたいなもので、表玄関の方におじさん家族、裏玄関に僕とばあちゃんが住んでいました。ある日、僕がばあちゃんに、「ねえ、ばあちゃん、なんで俺、両親がいないの」と聞いていたとき、ばあちゃんに「死んだじいちゃんが川に釣りに行ったときに、箱に入って、そこにいる犬と、赤ちゃんが流れてくるのをじいちゃんが拾って、かわいそうだからって言って、連れて帰ってきた。だからあなたは、お父さんもお母さんもいないのよ」と言われて、僕は本当にそれを信じていました。

でも、いま思い返すと、人の家に一緒に住まわせてもらうという、なんか落ち着かない自分というものがいて、溶け込むことが非常に難しかったように思います。

その中の二つのエピソードです。おじさん家族には、僕と世代がそう変わらない娘が二人いました。その家族は表の方で、楽しそうにケーキを買ってきて、家族団らんで、いま思えば当たり前のよう楽しんでいるんですけど、僕は隅の方で、そういうのをうらやましく見ているような子どもでした。

小学校のとき、僕はもう今年12月で57歳になりますけれども、

僕らの年というのは、シングルマザーで、女性一人が子どもを育てるといのは非常にバカにされたりする、そういうときでして、学校に僕が行くと、たまに友達とか同級生から「親なし」と言われて、それを言われると、僕もさすがに腹が立ってけんかをするんですけど、おじさんところの子どもも僕と小学校が一緒だったので、僕が学校で問題を起こすと、当然おじさんの耳にも入ります。そうなる僕は当時しつけどと思うんですけど、おじさんにすごく怒られました。でも僕はその理由を、なんていうことを言えず、住まわせてもらっている身だから我慢しなきゃっていうのが日々、自分の中にあって。

僕は叱られるのはよかったんだけど、二つの言葉が僕を非常に怖い思いにさせました。「捨てるぞ」という言葉と、「もうこの家、出て行くか」という言葉に、僕はすごく敏感に反応してしまって、とにかく大人の顔色を見て、いい子でいなきゃ、この家から捨てられたら困るっていう気持ちをずっと抱えたまま、いい子を演じなきゃ、いい子を演じなきゃっていう、子どもながらに親がいない孤独感と、捨てられたら困るという不安感、それと、なんとも言えない、子どもながらの理不尽さを感じながら、一生懸命、僕は生きていたように思います。

優しいおばさんは母だった ～複雑な気持ちの中、祖母との別れ～

僕が小学校1、2年の頃から、うちのおばさんという人がよく遊びに来ていました。不思議なことに、おじさん家族はそのおばさんが来ると、やたら僕をいい子だ、いい子だと褒めました。なんでかよく分からないけど、なんでこのおばさんが来ると褒めるんだろう、不思議でした。

そのおばさんは、僕だけを買ひ物に連れていってくれたり、おばさんの家に遊びに連れていってくれました。「欲しいものがある？」って言われたとき、勇気を持っておばさんの前で、野球が好きだったので、「グローブが欲しい」「バットが欲しい」とかと言うと、何でも買ってくれました。だから僕の中では、このおばちゃんは、我慢しなきゃ、大人の顔色を見なきゃっていうのを全部払拭してくれて、このおばちゃんには、子どもながらに、自分自身の子ども

心を出していいんだと信じて、うれしくて、早くそのおばちゃんが来ないかなみたいな感じがありました。そんな人でした。

それが小学校5年のときに、ばあちゃんに呼ばれて、僕は本名が「丈二」というんですけど、「実はこのおばちゃんが丈二のお母さんよ」と紹介されました。僕はすごくうれしかった。なんだ、俺におふくろがいたのか。それまで小学校の運動会で父兄と一緒にする競技があると、僕は隅っこで、いつも参加できない。そんな中で、小学校5年のときに、僕を守ってくれたばあちゃんの言葉が、「お母さんよ」ということが、「これからそのおばちゃんと一緒に住むのよ」と言われてうれしかったんです。でもその反面、守ってくれていたばあちゃんと離れるのかなと思うと、さみしさも半分あって、いま思うと本当に複雑だったように思います。

母との新しい生活 ～母は有名な任侠の組長の愛人～

それから、「そのおばさん」＝「紹介された大好きな僕のおふくろだろうという人」と一緒に暮らすようになるんですが、そこ

ら僕の地獄が始まりました。毎晩酔っぱらって帰ってくる。酔っぱらって帰ってきたかと思ったら、夜中に「たばこを買ってこい」と

無理難題を押しつける。学校から帰ってくると、テーブルにお金だけが置いてあって、これであたかも飯を食べておけみたいな。夜、待っていても帰ってこない。あれっと思ったら、2、3日、平気で帰ってこない。あまりのその変化のギャップで、僕は2、3度、怖くて、嫌だと思って、これだったらおじさんたちと一緒に住んでいた方がまだいいやと思って、脱走したんですけども、やっぱりあちゃんの家にとどり着くことはできませんでした。

そんなある日の夜、スーツ姿の大人の男3人くらいが僕を迎えに来ました。服を着替えさせて、夜の繁華街に連れていきました。連れていった店は、いまで言うホステスさんがいっぱいいるクラブでした。そこにおふくろは着物姿ででんと座って、その横にすわった、なんか品のある男性もいて、その周りにはスーツ姿の大人が十数人いました。

横に僕は座らされると、今度はおふくろから、「丈二、この私の横にいる人が、あんたのお父さんよ」と言われました。「え、親父がいたのかよ」と。でもそのとき、僕は全然うれしくなかった。もう、あれほど大好きだったおばちゃんのギャップは、おふくろがひどすぎて、もうこれ以上、勘弁してくれよと。だから正直言って、そのときはうれしくなかった。まあ、いまもう言っちゃうと、僕のおふくろというのは、僕の地元は土佐の高知です。高知のやくざ



講演する高知氏②

の親分の愛人でした。年をとって分かるんですけども、そこらの組だったらいいんですが、僕のおやじというのは、全国区でもなかなか有名な親父だったらしく、その人がお父さんと言われても、全然うれしくありませんでした。

それから親父たちとも一緒に生活をするようになりました。親父は毎日帰ってくるわけではありません。週に2、3回しか帰ってきませんでした。でもいま思うと本当におふくろも僕もすごく大事にしてくれました。

青春の憂鬱 ～中学、高校時代～

そんな中で中学、高校。僕は明德義塾という学校を、おふくろから勧められました。僕は一言で、「うん、そこへ行く」って言いました。なぜかという、親から離れることができる。そういう思いで、僕はうれしくて、あとは野球もやっていたおかげで、明德に行くことを決めました。

中学のときには本当に家に帰らず、小学校の友達のところにと泊まりに行き、その頃から、俺、ちょっと普通じゃないのかなと。親父とおふくろたちとみんなで食事に行く、買い物に行くといったら、友達のところにも、若い衆が迎えに来て、僕を連れてい

く。でも僕は周りの友達とかには、僕の親父はやくざの親分だとは、とてもじゃないけど言いたくはなかったので、黙っていて、でもたぶん、周りには不思議だと思っていたと思います。

そして高校。そのまま僕は、外に出たっておふくろに言ったんですけども、案の定、「あんた、高校まで上がるんだから、どうせなら行きなさい。野球もやっているんだから、頑張って、可能性を信じてやりなさい」ということで、そのまま僕はスライドで明德義塾高校に行きました。

母との絆 ～親子の思い出～

それまでおふくろというのは、参観日、あとは家族が学校に来るような教育的な催しものには、一度も出たことがありませんでした。それが、僕が17歳の高校2年、3年という、大会ももう限られてくる野球人生というとき。明德義塾というのは、当時、全寮制でしたから、大会近くの大事なときになると、父兄が話し合いをして集まってくれて、学校や寮で出る食事とは別に、肉料理とかを一生懸命作ってくれる。いつもそういう感じでした。

僕らは練習が終わって食堂に行ったときに、僕の同級生が「おい、見たことないおばちゃんいるけど、あれ誰だよ」。「え」。最初、僕も分かりませんでした。なぜならおふくろというのは、外へ出るとき、家でもそうですけど、必ず若い衆が4、5人ついていました。それに着物姿。そういった、いまで言う極妻（「極道の妻」の略）

みたいな格好しか僕は見たことがなかったので、まさかすっぴんで、ジャージの上下で、父兄と一緒に、料理もまともに作ったことがない人が手伝っているなんて、想像がつかなかった。でもよく見たら、おふくろだったんです。

いま思うと、あれほど嫌いだったおふくろも、その1回だけだろうと思っていたものが2回、3回、4回、5回と、若い衆も連れなくて、必死で免許をとって、一人でエコカーみたいな小さい車に乗って、40分で着くところを2時間半かけて来る。そういったことを積み重ねてもらおうと、あんなに憎んでいたおふくろが来てくれることに、なんかだんだんうれしくなって、最後あたりは、本当にこれが普通の親子の会話かな、普通に笑って。そんな時間が3日間くらいあったような気がします。

母の自死 ～母と別れた夜に～



講演する高知氏③

ある日、消灯前にフリーの時間が30分ありました。おふくろはどうしてもそこを狙って、「今日中に進路を決めてほしい」と。でも僕は、「おふくろよ、俺の進路は決まっているだろう」と。なぜなら、数少ない帰省のときに、若頭であつたり組の人間に、「野球でけがをされたら困る。大事な身体だから、跡継ぎだから、もうそのへんにして、身体だけは大事にしてくださいよ」と言われていました。それは本気なのか冗談なのか分かりませんが、なんとなく俺の進路は決まっているんだろうと思って、おふくろが来てくれた夜、車の中で話をしました。

そうしたらおふくろが、「任侠の世界だけは絶対に駄目だ。頼

むからあんた、野球にもう一回懸けて、せっかく大学からもセレクションの話が来ているし、頑張ってみたらどうだ」と。でも当人の僕は、プロには行けない、自分の素質がどれくらいのものかは分かっています。でも、たまに帰省したとき、あれほど派手だった家、置物、おふくろの着物、バッグ、宝石などが、だんだんなくなっていっているのが分かっていました。僕が「おふくろ、実は金に困っているんじゃないの」と言っても、僕には本当のことは言いません。でも僕は察知して、「だったら俺、地元で就職するよ」と言うと、「本当にそれでええの」とおふくろに言われたので、「うん、

ええよ。じゃあ俺、もう消灯になるから、寮に戻るな」って言って、車から出て、ドアを閉めようとしたとき、おふくろが「ねえ、丈二。私、きれいかな?」「はあ?実の息子に何言うもんねん、気持ち悪いわ」と言いました。ほどよく僕も反抗期でしたから、「そんなことはどうでもええから行くぞ」って言って、ドアを閉めました。最後に車の中のおふくろを見たとき、おふくろは泣きながら笑って手を振っていました。

その1時間ちょっとくらいした後です。おふくろは死にました。自殺でした。

父の真実とやり場のない心 ～心の崩壊、刺激的な生活で内面を見ないように～

おふくろが死んで、ばあちゃんと何の用事で役所に行ったか、あまり覚えていないんですけども、そのときに、ある書類を見ると、俺がお父さんだと言われていた人の名前が違っていたんです。「ばあちゃんよ、これ誰よ。俺の親父の名前じゃないんだけど」。そうしたらばあちゃんがおろおろしながら、「実は丈二、あんたのお父さんはあの人じゃなくて」と言いました。「ちょっと待ってくれよ。俺、地元でももういいかげん、何々組の組長の息子っていうことで通っているのに、いまさら、あの人親父じゃありませんでしたって、勘弁してくれよ」って。あれほど俺を守ってくれた、唯一、俺が信じられるばあちゃん。なんで俺を通り過ぎる大人は、みんな

俺に正直なことを言ってくれず、嘘ばかりついて。なんで俺だけこんなに苦しなきゃいけないんだ。もう絶対に大人は信じないって、怒りと孤立と、また俺は端。ガキの頃に思った、同じことをまたここで。俺が何をしたら、僕は完全に心が壊れてしまいました。

学校を出た後、僕はとにかく自分の心を守ろうと、刺激的な生活で、とにかく自分に向き合うことが嫌で、内面をみないように、毎日けんかをしていました。毎日家に帰りたくないし、女の子をとっかえひっかえ、その子の家に泊まったり。根性論を強化して、むしろこういっただけを奮い立たせて生きていました。

心の傷を抱え東京へ ～成り上がる、金は裏切らない～

でもやっぱり、実の父親じゃなかったということが自分は耐えられなくて、バレたらどうしよう、それが怖くて。それが当時、偶然、矢沢永吉さんの「成り上がり」という本を読んでいたもので、これだと。田舎を手放して、都会で俺は成功して成り上がれば、後でバレてもみんな許してくれるだろう。だからこそ俺は絶対に成り上がってやる、そういう気持ちを持って。とにかく成り上がって金をつかめば、人は信じられないけど、金はきつと裏切らないだろう。金があれば幸せが手に入ると、自分で勝手に信じ込んで。でもそうするしかなかったんです。だって、大人を信じられなかったから。

きつこうだろうという自分を信じて、僕は東京に出ました。

もちろん身内もない、兄弟もない。本当に東京へ着いたとき、呆気にとられました。人の多さと、刺激と、見るもの全てが刺激でした。

そんなときに、とにかくまず自分は、自分のすみかを作らなきゃいけないということで、地元の友達の紹介とか、そんなのも経て、昼間はアパレル業、夜はホスト、皿洗いかから一生懸命昼夜働いて、資金をためようと頑張りました。

薬物に手を染める ～憧れの人たちの仲間になれるなら(ゆがんだ認知)～

そんなときに、夜のホストの仕事で仲良くなった友達から、東京で一番流行っているディスコと一緒に遊びに行こうと言われてました。その頃僕は金をためることに必死でしたが、目標は成り上がると決めてたけれど、誰を目標にしていかなかった。そんなモヤモヤしているときに誘われた日でした。

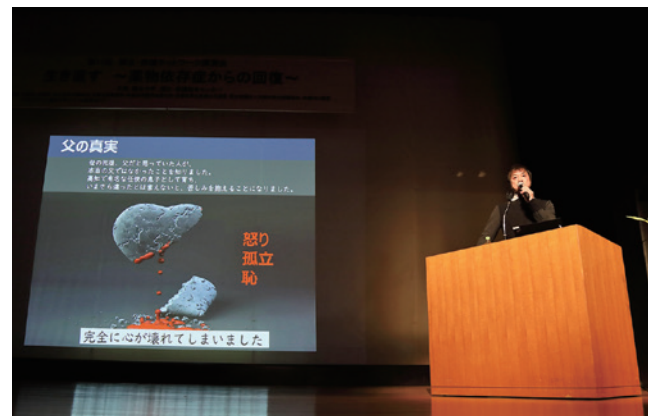
一番流行っている東京のディスコに行きました。すると、一般席の奥のVIPという席、そこは本当に、僕にとって衝撃的でした。金持ちの二世であったり、大学で言うなら何とかボーイというのがチャホヤされる時代。いまはどうか分かりませんが。とにかくそのVIP席には、先端に行く、旬な、おしゃれな人たちが豪快にお酒をあおっていました。僕と年齢もそう変わらず、もちろんバブルという時代背景もありましたが、バリバリ働いて、バリバリ金を稼いで、いい服を着て、いいものを食べて、理想の女性を手に入れて、夜は豪快に遊ぶ。そんな人たちがいました。

僕はそこに目標を定めました。ここや。学もなければ何も無い、資格もない田舎者が目指すものは。だったら目の前にいるこういう人たちに近寄って、仲間になって、情報を得て、自分作りをしていこうと、僕は何度も足を運びました。

そんなときに、おしゃれにその人たちが、薬物を回し吸いしていました。いま思えば、僕は進んで手を出しました。なぜか。この仲間に入れるなら、憧れている人たちの仲間になれるなら、喜んで。あとは、自分は田舎者でしたから、いまだとゆがんだ認知だとは認識できますけれども、当時の明德義塾の野球部の根性

論、勝つための根性論ですから、都会に出たら、僕は勝手に、「できない」「やれません」、そんなことを口にしたら、チャンスなんか絶対に来ない。だったらかましを利かせてでも、「やれます」って言ってから、そこでどう努力をするか、そういうふうには、自分に目標を思い込んで、いまそんなことを思っていたら大変なことですけど、そういうふうには自分を信じて、だからこそ仲間になりたい。そうしたら、僕のところに回ってきました。僕は喜んで薬物に手を染めました。

でもここでまた、面白いことが起きました。よくテレビとかメディア



講演する高知氏④

アでは、薬物をやると廃人のように、「ダメ。ゼツタイ。」みたいな、人間失格みたいな、ゾンビかみたいな表現をしています。全然。むしろ僕は手を出したときに、「あれ、イメージと全然違う。これなら酒で酔った方がたちが悪い。薬物の方が、何やこれ。全然こんやん。意識もしっかりしているし、これだったらいつでもやめられるやん。」これを依存症の世界では「拍子抜けの体験」という

らしいんですけど、初めてやったのがそういうことで、ズルズルと僕は、ストレス解消に薬物を。これだったら酒乱の方がたちが悪い。だったらまだ薬物の方がおしゃれでいい。だって東京で、おしゃれな、先端で金を稼いでいる奴らがおしゃれに使っているんだから、俺はおしゃれなんだと、また勝手にゆがんだ認知で進んでいきました。

大金をつかむ ～AVプロダクションの成功。しかし、人間関係のトラブルが頻発～

お陰様で僕は、その仲間たちと契りを交わすことができました。お金をつかむ。人となりということより、金をつかむことが全てを手に入れることだと、入れられるんだと思っていたので、やっぱりそのネットワークに入れたときに、僕は金をつかみました。あっという間に。僕はAVプロダクションを経営しました。億以上の金が手に入りました。

でもやっぱり20代半ば前、人となり、そういったものもモラルもまだ分からない社会人が、小僧が金をいきなり稼いだもんだから、人間関係のトラブルがすごく起きました。裏切りや、利用されたりと、本当に、しょっちゅう人間関係の困難は起きました。

でも、これも若いからです。本当に僕は疲れ果て、全てを手放すことにしました。

芸能界デビュー ～順調な芸能生活を過ごす一方で、過去がバレる恐怖との闘い～

28歳のとき、これから僕は何をしようかなって考えていたときに、芸能界にスカウトされました。もちろんこれは僕一人というよりは、20代の前半にけんかで知り合ったタレントと仲良くなって、そいつと一緒にスポーツクラブに行ったとき、偶然そいつが所属しているプロダクションの社長とサウナで会って、「どうも、はじめまして」って言ったら、その社長が明るく日に、ぜひ会いたいということで、会おうかな。それで明るく日に行ったら、ありがたいことに「僕に人生を預けてみないか」と言ってくれて、僕もどうしていいかわからない。そのときにはもう僕は、AVで僕を信じて頑張ってくれたAV女優がいたので、その人に僕なりのけじめをつけようと思って、1回目の結婚をしました。そういうのがあったので、よし、次の段階に進んでみよう、お願いしますということで芸能界へ入りました。

そうしたら、やっぱり大手のプロダクションってすごいです。あれよあれよと仕事がどんどん舞い込んでくる。自分で何も考える暇がない。その社長というのは、「育成所とか、劇団とか、そういう学校へ行って演技を習う必要はない」って言うんです。「何ですか。僕、そうじゃないと専門用語もわからないし、迷惑をかけるのは嫌です」って言ったら、社長は、「おまえはロボットになるつもりか。おまえの個性はお前しかない。だからそんな余計な

ことをせんでいい。自分を信じて自信を持っていけ。現場で一つ一つ覚えていけ」、そういう人でした。

でも、だんだん仕事をもらえるようになり、バラエティーとかにも出るようになると、僕は28歳でデビューなので、「あなたはそれまでどうしたの」とか、いろいろと聞かれるようになりました。それがすごく僕は怖かったです。過去がバレたらどうしよう。しかもそれがマスコミに、メディアによって、地元のみんが親父と思っているのが本当の親父じゃなかったって、僕の口からではなく、バレたりしたらどうしよう、本当に、仕事が舞い込めば舞い込むほど、僕は恐怖でいっぱいでした。

そんなときに、僕は1回目の結婚をしたと言いましたが、お陰様で僕は女癖も悪かったので、無事1回目が終わりと、また役者道をまい進しているときに、女優と出会い、結婚することになりました。そこでも自分なりに、「よし、自分の人生、また変えるぞ」と思いながらも、人気商売というものは、いつまでも絶頂であるわけじゃない。結婚して2、3年で、その当時の義理のお父さんが介護が必要になっていたので、僕ら二人は仕事をさせていただきながら、その介護を、プロの人たちに任せて、金銭面は僕らが全面バックアップしようという選択をしました。

サイドビジネスへの挑戦と大きな困難 ～薬物使用経験女性との不適切な関係と経営難に直面～

そういった中で、40歳をすぎ、僕たちも芸能界で生きていくには、健康でありながら、自分たちのスタイルをどうやって保つか。メディアが宣伝しているエステというものがどれほどぶざけたまやかかしを言っているかって、芸能人は決してテレビで宣伝しているもの、化粧品、エステ商法は使いません。なぜなら嘘だからです。だから自分たち自身が現役の商品であり、人さまの前で、少しでも意識して頑張っている姿を僕たちは提供しよう、あとは人気商売、どうなるかわからない。だったらいまのうちにセカンドビジネスをやろうということで、夫婦で話して始めました。

さっきも言ったように、僕は女癖が悪かったです。そういうことでサイドビジネスを始めたら、最初はまた、あれよあれよとすごく店舗が増えていきました。でもそんなときに薬物使用経験のある女性と出会い、僕は不適切な関係に陥ってしまいました。

芸能人がそういった健康産業をやるといって、メディアが取り上げてくれて、最初はすごいです。でも、何もかも、人を使う、使い続けて働いてくれる、そういった会社作りというもの、最初の花火だけではなく、そこからどうやって人間関係を構築し、しっかりと、働いてくれてありがとうという気持ちというものを大切にしながら、長く続けるということが大事なのですが、僕はまだまだ勉強不足でした。そのため、従業員とのあつれきによる人手不足

と経営難、問題従業員とのパワーゲーム、大手エステサロンとの契約破棄などの難問が次々と降りかかってきました。

最初はみんな募集をかけると、芸能人がやるということで、すごく来てくれました。緊張感も、石の上にも3年、でも研修期間は3カ月って、よく決めたものです。4カ月目から、芸能人の店だからお金があるだろうということで、全てではないですが、働き方を、ちょっとないがしろにしてくるスタッフさんも増えてきました。でも僕もトップとして、いろんな人とどう向き合って、同じ方向、



講演する高知氏⑤

目標を持ってやるかということに勉強不足だったので、本当にいろいろな問題が起きました。僕のいままで生きてきた範囲では、従業員に対して精神論、根性論、信用できない人間関係、人間

でも技術があれば起用し続けることしかできませんでした。その上本業もやっていたので、連続ものの仕事をやったりすると、現場はスタッフ任せになりました。

最も大きな間違い、そして逮捕 ～終わりのない始まり、本当の生き方に気づく～

そして、最も僕の大きな間違いは、薬物の秘密を共有している人間が、一番自分を分かってくれと勘違いして、いろいろなことを相談する相手に選んでしまっていたことです。

2016年6月24日、僕は逮捕されます。逮捕で全てを失い、でもいま僕はこうやって皆さんの前に立たせてもらっている今日、いわば終わりの始まり。そして僕はいま、本当の生き方に気付けたように思います。

最初の2年というものは、本当に自分の恥が人にバレたくなくて、あとは執行猶予というものに対して、僕自身に正しい知識がない。だから執行猶予で4年間という日にちをもらったんですが、刑務所

に入っているのと同じくらい反省しながら、どこにも出ちゃいけない。とにかく家で身を隠して耐え、我慢する。それが執行猶予だと思っていました。僕の周りもそういう認識でした。だから4年、なんとか辛抱しよう。反省しよう。静かに、バレないようにというよりも、とにかく引きこもっていることが反省の一つだというふうに勝手に思い込んでいました。

でも結局、僕は2年、苦しんだ時に、「もう無理だ。これだったら死んだ方がいい。おふくろも自殺、やっぱり俺も、人生しくじったら、俺のけじめの結末はこれか」って。でも死ぬませんでした。いまだから言える。僕は生きたかったんです。

自助グループとの出会いとその仲間が与えてくれたもの ～共感・安心感・ユーモアなど～

そんなときに、超強引な女性が僕を仲間に入れてくれました。ここを詳しく話すと本当に時間がないので端折りますけど。その人が「高知さんの過去を、これからは価値に変えてほしい。私と一緒に啓発をしてください」。まさかこんな言葉を聞けるとは。俺の恥が、俺の恥ずかしい生きざまが本当に人の役に立つのか。でもこの人を信じてみようと思いました。

そこから自助グループであったり、同じような境遇で苦労しながら回復し続けて、もう一度自分を信じて、社会の役に立てる一人

になろうという仲間たちと出会いました。そんな仲間が与えてくれたもの。俺だけじゃなかったという共感、あとは、どんな過去も批判されない安心感。そして深刻な話を、過去で笑い飛ばせるみんなのユーモア。

でもそれだけではなく、僕がいまこうやって、自分に起きたことを皆さんの前でさらけ出して話せるようになったのは、何よりも僕は12ステッププログラムというものに取り組んだからです。

12ステップの威力と自助グループの重要性 ～自分を変えてくれるものと支えてくれるもの～

自分から逃げていた。自分を自分で否定していた。それまでは、他人を目標に置いて、憧れに置いて、自分はそのに向かって必死でしがみついていた。でも、だからこそ届かなくて、追いつかなくて苦しんで、僕は薬物というものと、子どもの頃の寂しさを少しでも埋めようと、そばにいてくれる女性のぬくもりを求めた。でもそれではまた同じこと。第二、第三を起こしてしまう。薬物じゃなくとも。自分のいままでの思考、考え方を変えなければ。このゆがんだ認知をなんとか変えなければ。そう思って僕は12ステッププログラムに取り組みました。

12ステップによる気づきです。僕の生き方の問題点は、誰に何をどう相談すべきかが、分からない。あとは意見交換やディスカッションが苦手で白黒思考。だって学生時代から勝負負けしかないので。あとは感情のコントロールができない。ガキの頃から我慢、いい子でいなきゃ、いい子でいなきゃ。我慢することが何か自分の性格の一つに刷り込まれてしまって、自分の本当の、子どもながらの正直な感情が出せない。そして押さえ込んだあげく爆発する。だから僕は感情の波がすごく激しかった。でも12ステップに向き合うことで、自分の問題を認めることができました。

つまり僕にとって自助グループとは、共同体という自分を支えてくれるもの、そして12ステップという自分を変えてくれるものの両

方が必要でした。

あともう一つ、医療と民間団体の連携も必要です。

僕は、仲間の手助けを実践し続ける、本当に先行く先輩、ロールモデルとの出会いの場に恵まれました。

いま思えば、心の空白、地位、名誉、権力、金をつかめば、心の、本当の大切な内面が埋まると思っていました。でも埋まるどころかどんどん広がっていきました。



講演する高知氏⑥

おわりに ～今を生きる～

いま思うこと。人生のターニングポイントは、ピンチのときに訪れた、自分だけでは解決できないと認めたときから、新しい人生が始まった。一緒に回復する仲間との出会いで、僕は本当に今日を迎えることができます。

いまを生きる。受け入れがたい過去が誰かの役に立つ過去に、未来はいまの積み重ねだと理解できるようになりました。いま本当に僕

は、皆さんの支え、応援、こんな僕でもファン、そんな人たちに支えられながら、まさか自分の恥を、こうやって皆さんの前で話を聞いてもらえる時間、皆さんの大切な時間を、少しでも僕の話聞いていただける。そんな自分に回復し続けることで、いま僕はすごく幸せです。

本当に皆さん、ありがとうございました。

(会場から拍手)

俳優 高知東生 氏

公益社団法人 ギャンブル依存症問題を考える会代表 田中紀子 氏

田中 皆さん、ご紹介ありがとうございます。田中紀子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。さて、高知さん、無事講演が終わってホッとしているところだと思いますが。

高知 ええ、もう帰っていいという感じ、ホッとしました。

田中 高知さんはものすごい緊張しいで、こういう講演とか、なんかもう嫌だ、嫌だみたいな感じなんですけど、でも、こういう自分の経験を話していくということが、ご自身の使命として、今では色々なところで言ってくださっています。私たちも依存症の啓発が、人生の目的みたいな感じになってしまっていますけれども、そういうことをやっている私たちにとってこういう場はすごくありがたいのかなと思っています。

私たちは、高知さんと二人で『たかりこチャンネル』という番組をYouTubeでやっているんですけど、ご存じの方はいらっしゃいますか。(会場から手があがる) ありがとうございます。

高知 ありがとうございます。

田中 こんなふうに『たかりこチャンネル』というYouTube番組で、二人で依存症のことを啓発しているの、ご覧いただけましたらと思います。今日はちょっとYouTubeを撮影しているような雰囲気、ざっくばらんにやっていきたいなと思っていますので。

高知 やっちゃいますか。

田中 はい、よろしくお願いいたします。

高知 お願いします。

逮捕された時の言葉の意味と当時の心境

田中 今日この会場にいらしていただいている方は、一般の方もかなり来ていらっしゃるということなんですけど、司法の関係者の方とか、保護司さんとか、どちらかという、高知さんを取り締まる側だった人たちはどのくらいいらっしゃるんですか。

高知 麻取(厚生労働省の職員である麻薬取締官の略称)は来ているの。

田中 あははは。はい、ありがとうございます。他は依存症のご家族とかそういう方だと思うんですけど。高知さんは逮捕されたときに、麻取の人に「来てくれてありがとうございます」と言ったというのが、もうぶわっと。

高知 たたかれましたね、当時。

田中 たたかれたり、マスコミにも出たんですけど、あのときはやっぱりそういう気持ちの方が口と出ちゃったという感じなんです。

高知 そうですね。捕まる前まで自分の心の中では、やっぱりこのままではやばい、捕まる。もう大事な家族もこのままだと失ってしまう。やばい、やめなきゃとは思っていたんですけど、やっぱり薬物の怖さというものは、やめられなかった。

そこで、麻取に踏み込まれたときに、本当に素直に、「うわっ、これで終わった」という気持ちと、「うわっ、これでやめられる」という安堵感で、つい出てしまった。

田中 うん、もう終わったと。

高知 はい。

田中 常にそういう引き裂かれる感情があったわけですよね。だって、清原和博さん(元プロ野球選手)とお話しされていましたけど、清原さんが先に捕まったときに、「清原、捕まったよ、ばかだなんて思ってたけど、自分は大丈夫だ」と思っていたんですよね。

高知 そう。これは不思議なんです。本当にマスコミとかメディアでは、もうこんなに芸能人、著名人が捕まっているのに、もしそこで使っている人たちは、なんで、危ない、自分たちもこうなるからやめようと思わないんだと。これは正直言います。使っている最中にテレビを見ましたけど、「バカだね、こいつ、俺は大丈夫だ」と思っちゃうんですよね、これは本当にね。

田中 でも、やっぱり心の片隅には、ああ、捕まるかもしれないという気持ちもあって。

高知 ある。

田中 だけど、やっぱりやめ方が分からないというか。

高知 いや、あります。

田中 そういう感じですかね。

高知 うん。あとは、僕の場合はやっぱり第三者、人間関係も絡んでいたんで、自分だけがやめようと思っても、なかなかやめられなかった。

田中 有名人の人だと、そこが難しいですよね。秘密を握り合うじゃないですけど、自分だけがやめるとなっても、それを暴露されたりして、逮捕はされていないけど、芸能界を引退に追い込まれた人なんかもありますものね。

高知 はい、そうですね。

田中 そこがやっぱり芸能界の人たちは(やめるのが)難しいなと思いますね。

高知 薬物を使って、本来ならもうこれがバレたら人生終わるぞということを感じ合っている。これはもう家族とかじゃなく、ソウルメイトみたいな、勝手にもうこの人間は間違いないみたいに思っているけど、違う、違う、だんだんやっぱり秘密を握り合う恐怖に変わってくるんですよ。もうそれに耐えられなかった。



対談の様子①

田中さん(伴走支援者)との出会いと啓発活動参加への誘い

田中 それで、私と出会って。出会ったときは、高知さんは本当にもう「放っておいてください」みたいな感じだったんですね。私がTwitterにダイレクトメッセージを出したら、実際放っておいてくださいと言われてたんですけど、私はそういうところは全然めげないところがあるので、しつこく会いましょうよみたいな。

高知 いや、これね、こうやって簡単にさらっと言っていますけど、

僕が彼女と出会うちょっと前から、あまりにもメディアにないことを、元妻と「復縁か」とかなんかとか、いろいろ言われたので、「おい、これ以上、迷惑を掛けたくないから勘弁してくれよ」と思っているときに、あ、そうだと僕はTwitterに、自分の日記のように毎日こうしている、ああしているというのを書くようにしたんですね。



対談の様子②

そうしたら、そのときに彼女がつながってくれて。面白いんですよ。僕、そのとき最も人間不信の全盛だったので、もう人に会いたくもなかったし、信じようと思った奴から利用されたりとか、もう本当に嫌だった。

そこで（田中さんからダイレクトメッセージが）来て、「会いませんか」と言われても、「すみません、いま自分は人間不信なのでそっとしておいてください。でも、あのときの田中紀子さんですよ。僕も捕まってすぐ160%たたかれている中に、あなたが擁護してくれた記事を僕は覚えています。ありがとうございます。だから、すみません、いまは放っておいてくれ」と言ったら、すぐ返事が返ってきた。

そうしたら、「何月何日の昼間のどこで予約しました。会いましょう」と。この人は日本語の意味を分かっているのかな。それで、もう一度僕は「いや、すみません。とにかく会いたくない。そっとしておいてください。執行猶予が切れて僕の心も落ち着いたら、そのときに」と言ったら、もう完全にパツと返事が返ってきて「予約しました、楽しみにしています」という、この強引さ。この人はちょっとイタイなど思いながら。でも、いま思うと、この強引さがなかったら今日の僕もないということは、本当に思うんですけどね。

田中 なんかいまはこんなふうにあい話でやっているんですけど、あの頃の高知さんは後から話を聞いたところによると、みんなに石を投げられるんじゃないかみたいな錯覚にとらわれてしまっていて、周りにいたお友達なんか、おまえ、外に出るなど言っているようで、もう外へは出歩けないような状況になっていたんですね。

そこで、たまには食事に行こうよと友達に誘われて行ったら、自分たちはもうちょっと残るから、先に帰ってみたいいな感じで言われて、なんか変だなど思っていたら、そこで週刊誌に売られちゃったりとか。

あとは、住んでいる部屋のお世話をしてくださる方で、すごい

い人だなど思っていたら、その交換条件で宗教に入ってくださいとか、そういうような、本当に弱っているときに、やっぱり弱り目にたたり目とよく言ったもんだなとすごく思うんですけど、悪い人間関係がすごく寄ってくるんだなというような状況だったみたいですよ。

そのとき、私にくれた返信が、「ものすごくいま人間不信で、とにかく執行猶予の間は、自分で自分をしっかり反省しながら頑張っていていくので、執行猶予が切れたときには、またこちらからご連絡させていただきます。それまでは、とにかく自分で頑張らなければいけないので、しっかり意志を持ってやっていきます」みたいなことを返してきたんです。

私は、これは危ないなと直感的に思ったんですね。本当にこんなことを言っていると、この人は死んでしまうのではないかと心配したんです。

それは、やっぱりたくさん仲間たちを見てきて、「自分一人で頑張ります」と言っているのは絶対うまくいかないということもよく分かっていたし、相当この人は孤独なんだなということも、それは長年の支援者としての勤があったから、これはまずいというように思えたと思うんですね。

です。もうめげずに、とにかく会ったらこっちのもんだみたいな感じで、本当に引っ張り出したという感じだったんですね。

そのときに、私が言ったことは覚えていて、先ほども出ていたけれど「高知さんのこの経験を他の人の役に立ててほしい。一緒に啓発をやってほしい」と言ったときに、「自分のそんな経験が役立つのはすごいうれしい」と言ってくれたんですね。

それで、高知さんといろいろな話をしたんですけど、初日は7時間ぐらい話したんですね。

高知 うん、結局ね。

田中 結局。

高知 喫茶店を二つぐらい変えたよね。

田中 うん、そう。嫌だみたいな感じだったんですけど、会ったらもう本当に7時間ぐらい話して。

主治医が松本俊彦先生というすごい有名な先生で、松本先生のお見立てもそうなんですけれども、実は、高知さんの薬物依存に関しては、ものすごく軽症なんですね。松本先生がおっしゃるには、依存症とも言えないぐらい、薬物愛好家というか、好きな人みたいな感じなんですけど、ただ、その背景にあるものが、本当に私たち重症の依存症者とまったく同じだということ、そのとき驚いたんですね。お母さんが自殺されているとか、やくざの組長の息子だったけど、それは愛人の息子でとか、そういう話を聞いたときに、この人は本当にまったく私たちの仲間なんだなというように思えたんです。それで、高知さんのこういうことを啓発してほしいと。

自分の過去を公表することへの葛藤と回復に向けて自分と向き合うために

役に立ててうれしいとおっしゃっていただいたんですけど、最初、高知さんはあまり深く考えてもいないというか、分かってもいなかったと思うんです。実は、高知さんはその辺の3次団体とか4次団体の、チンピラの愛人の子どもではないんですよ。もう私たちの時代だったら、誰でも知っているような有名な大親分で、もうすごい人の息子さんなので、お母さんが自殺しているとか、こういったことを世間に全部明らかにしましょうと言ったんです。それで、もう本当にそこからけんかが絶えなくなりましたよね。

高知 もう带状疱疹に3回なったり、めまい症に2回、本当にもう耐えられなかった。プログラムをもちろんやっているときだから、あのときはどうやって逃げようかなとか、このままだったら違う意味で死んじゃうよ、俺は思ったけど。でも、それをやれてよかった。

田中 本当に私、高知さんと一緒にプログラムをやらせていただくパディーだったんですけど、やらせていただいたときに、やっぱり高知さんの生きづらさというのは、これだけ大きな秘密を抱えていながら、全国区の知名度というって、どう考えても高知さんにとってつらい状況だなど思ったんですね。

もう「2ちゃんねる」みたいなどころには、高知さんのうわさ話

的なものがいっぱい書かれていたんですね。高知の組長の息子だとか、いえ、違う、徳島だとかね。

高知 そうそうそう。

田中 いろいろなことが書かれていたの、この秘密を抱えながら再生していくというのは難しいと、私の中ではそう思ったんです。

それで、これを全部明らかにしたらどうかとなったときに、もう本当になんか駄々っ子みたいになっていましたね。

高知 いやあ、それはやっぱり女房が女房だったから、いいかげんしくじってやっぱり女房の頑張ってきた人生というものを、俺はストップをさせてしまったような罪悪感もある中で、自分の人生をさらけ出したら、また女房に迷惑が掛かるじゃんとか、やっぱり先にそう考えてしまったので、勘弁してくれよ、もうそっとしておいてくれみたいな。

でも、そうじゃないな。まず自分に本当に向き合って、何よりも自分を大事に、自分に正直に、ありのままに行くことが、次の階段へ行く大切なことだし、周りの人にも本当の意味でためになることだからということ、プログラムをやって分かって、いまこうやって元気で、すごく楽で幸せ。

自分がこうやって頑張って回復し続けて、皆さんの前で、ありのままの自分を出すことが何よりもの償いだと思ひ、あとは自

分自身を大切に、残りあとどれぐらいの人生を、おふくろの分までとか、なんかいますごく楽に、楽しく過ごしていますけど。

再起を応援する社会に変えるために

田中 でも、ここまで来るのは本当に大変でした。一番最初は「婦人公論」の雑誌のインタビューだったんです。「婦人公論」がもう本当に、いの一番にこの家族の秘密を全部書いたんですね。「婦人公論」というのはすごい雑誌じゃないですか。こちらもやっぱり「婦人公論」ならと思って、安心して出たわけです。ヤクザの息子だったとか、お母さんが自殺していたとかいうことを全部書いたんですけど、出来上がったらいよいよもない記事だったんですね。

高知 やばかったよね、あれ。

田中 やばかった。当時は、まだ二人は復縁するのではないかと、すごくささやかれていたんです。前の奥さんとはもう会っていないし、これから先もやり直すことは一切ないと言っているのに、「一番いま会いたいのは元の別れた女房で、俺はいまでも思っている」みたいな文章になっていました。

そんなことは一言も言っていないのに書かれたので、それでもう高知さんは、「ほら、見ろ」と。「こういうものを出しても、こんな感じだ」みたいになってしまって、すごくお怒りになっていたんですね。

でも、そこでバディーとしての、私の役割としては、これをちゃんと「婦人公論」に文句を言うことだと思って、「いや、高知さんはこんなことは言っていない。ちょっと私の方で校正させていただいていいですか」ということで、そのときの、やりとりしたテープを聞いたりしながら全部書き直したんです。8割方赤を入れて。

それで、なんかもう向こうもお手上げたのか、私のけんまくに恐れをなしたのか分からないんですけど、私の書き直したものでOKが出たんです。それが出たら、ものすごく記事がバズったんですね。

高知東生はこんなに苦労していたのかということで、やっぱりみんなが受け入れてくれた。高知さん、よかったですねと。ヤフーのコメントですら、「薬は悪いことだけど、こういう背景があったということを知った」というようなことが、ばあっと出たんですね。そういう経験で、少し安心したという感じですか、そういう、みんながやっぱり受け入れてくれたり、そんなたたかれることがなかったじゃないですか、あの記事に関して。

高知 そうですね。

田中 少し言っても大丈夫なんだなみたいな感じですかね。

高知 うん。それまでメディアというものは、やっぱり人の不幸は蜜の味で絶望と、もうぐたくたになったところを叩くけど、そうじゃなく、仲間と出合って回復し続けている、いま自分はこうしているんだという過程というものを書いて欲しいんだけど、なかなか正しい知識を持った人がいないから、自分の知識がない部分をなかなかデフォルメして、「昭和枯れすゝき」みたいなものにしてしまう。

田中 そうそう、そうそう。すごくさいらプロマンスみたいになっていたんですね。

高知 そう。そんな事実はないのに、でもそこでやっぱりリコちゃん（田中紀子さんの愛称）が正しい知識のもとで、この人はいまこうしているんだという過程をしっかりと文章に描いてくれたこと



対談の様子④

で、こんなに世の中の評価が変わるのかと、やっぱり正直言うてうれしかった。

田中 あとは、本当によく「依存症の人に対して寄り添っていくには孤独が大敵」とか、「再起する人たちを孤独から守っていくには寄り添うことが大事」とかと言うんですけど、やっぱりただ寄り添っているだけでは、人なんか再起できないんですよ。「応援しています」と言っているだけでは何にも変わらない。やっぱり寄り添うということは、伴走支援していくことだというように、私も長年の経験で思っているんですね。

高知さんが前面に出て、苦情を言ったらトラブルのもとだし、また何を書かれるか分からないから、やっぱりそこをサポートしていく、伴走支援をしていく、寄り添っていくと決めた人は、そのところを手伝っていくということがすごく重要なんだということには、私もすごく身をもって思いました。

その後、フジテレビでも「密着させてくれ」と言ってきた。フジテレビは、カジノ法案のときにお世話になったディレクターだったんです。どうしても高知さんに出てほしい、独占でインタビューを撮らせてくれみたいな感じで。

だから私は事前におどろおどろしく背景を黒にして、赤い文字で「覚せい剤の恐ろしさ」とか絶対やらないでよと。明るい雰囲気、音楽もポップなものにしてほしい。それで、再起している姿を撮るんだったらいいと言ったんですけど、もうそんな約束はどこへ行っちゃったのという感じで、本当に黒バックに赤い字で「高知東生、覚せい剤の恐ろしさ語る」と出ちゃったんですね。

高知 だって本番前まで、すごく笑いながら、高知さん、いい笑顔に戻ってきていますねと、もう笑い転げて話をしたら、「はい、本番行きます」と俺はその笑顔のまま、自分のありのまま出たら、「カット。すみません、高知さん、笑わないでください。いままでのノリはなし」ということで。「何だよ、おい」ってね。

田中 そんな感じになって、暗い番組になっちゃったんですね。

そうしたら、高知さんのところに、周りのお友達とかが、「おまえ、そんな、まだ大変なの」みたいな感じで電話がかかってきたわけです。それでまた高知さんが、だから出たくないんだよみたいになって。

私たちはけんか友達じゃないですけど、高知さんも私にしかぶつけようがないから、「だから出たくないんだよ！」みたいになったので、じゃあ、分かりましたと、フジテレビに速攻電話して、そのディレクターに、あんたね、何やらかしてくれているのよみたいな感じになって、「これを全部、編集をやり直さなかったら、絶対に2次使用はさせないからね」と言って。

フジテレビは、夜のニュースでやったから、その次の日の「バイキング」（テレビ番組）で絶対使いたいですね。「この編集だったら、絶対やらせない」とか言って、次のときに全部編集を変えて、明るい感じで。

高知 全然変わっていたよね。

田中 全部変えたんですよ、トーンを。そうしたら、今度はまた



対談の様子③

別の知り合いとかが、「見たよ」と高知さんのところに連絡が来て、「すごく頑張っているんだね、元気そうでよかった」みたいな。

あ、入ってこんな感じで簡単に変わるんだなと。やっぱりこの国がどのようにやり直そうと思っている人たちを映し出すかということ、どのようにメディアの人とか力のある人たちが再起に対して報じていくかということは、すごく重要なんだなということを経験したんですね。

ですから、ぜひそういう叩くだけのメディアには、ちゃんと皆さんも意見を言っていただいて、再起を応援するというように、社会のムードを変えていただければなと思っています。このような感じで、本当に私たちも一步一步階段をね。

高知 そうだね、うん、ありがたい。

田中 あのメディアに出たらこうだったとか、このメディアに出たらこうだったとかということは、もういっぱいありました。

一番びっくりしたのは、丸山ゴンザレスさん（ジャーナリスト）のYouTubeに出たときで、あれは350万回ぐらい回っているんですけど、ものすごくヒットしているんですね。それがもう一和会（日本の暴力団）の総長の息子とか、一和会の顧問の息子とか何とかが、ばーんと名前が出て、ものすごい衝撃的なサムネイルを作られてしまって、もうあれも、あ痛たたたという感じでしたよね。

撮っているときは、もう高知さんが嫌なところは全部やりませんとかすごく言ってくれるんだけど、最終的にはやっぱりみんなバズるようになってしまっただけ。

でも、そんなことも経て、私たちも学びながら、どうやったら社会の雰囲気が変わるのかなということと一緒にやってきました。高知さん自身は、実は本当に見えないと思うんですけど、テンパりやすいんですね。

高知 テンパりやすいに決まっているじゃん。

田中 そうそう。だから、こういう講演のときってテンパりやすいし、

急にインタビューされたりということよりも、私は、高知さんは文章がうまいなということをやっと気づきだしていたんですね。書いた自叙伝とか、ああいうのをやって。

すごくもうとんでもない時間がかかるんですけど、文章がうまいなと思ったときに、「Twitterで自分の気持ちを書いていったらどうですか」みたいなことを言ったんですね。そうしたら、このTwitterというのが、それまで高知さんは「今日は龍谷大学の講演に来ました、押忍」みたいなTwitterだったんですけど、それをやめて、自分の内面のつぶやきみたいなことをやるようになったら、すごく何度も何度も、高知さんのTwitterがヤフーニュースになったり、多くの共感を呼んで、いまは45,000人ぐらいのフォロワーになっていったんですね。

高知 そんなになるとは本当に思わなかったんですね。

田中 ですから、「再起を応援していく」と言うのは簡単なんですけど、やっぱり手探りで、どうやって再起をしていくのかということとか、そういうことを一步一步見極めながら、二人で相談しながらやってきたという感じですね。

高知 積み重ねだよ、本当に。

田中 うん。本当にいまはこうやって積み重ねて、お陰様で、先週は早稲田大学に呼ばれて、今週は龍谷大学に呼ばれてというね、どうですか。

高知 うん。俺、大学に呼ばれているんだよ。皆さん、どう思いますか、本当に。

田中 現役のときなんか、まったく縁がない世界ですよ。

高知 そう。まして、あんな高島礼子（俳優）を裏切っというね。本当に人生分からないもんだよ。

田中 そう。学生の皆さんがみんなね、高知さんに相談したりとか、もう本当に分からないもんだなというようなこととかが起るようになってね。

完璧主義によるプレッシャー、失敗への恐怖

でも、本当にたくさんけんかもしたし、一回なんか、超有名な白石和彌監督（映画監督）という方を知っていますか。

いま『孤狼の血』という映画とかを撮っている監督で、ものすごく有名な監督なんですけど、明日その監督と一緒に依存症の啓発ビデオを撮りますみたいな、そういう大きな仕事があったのに、それまでにいろいろやることとかがあって、また、その啓発ビデオで自分のコメントを出したりしなければいけないとか、いろいろなプレッシャーがあったときに、ちょっと俺、無理だから、明日バラシ（㊟スケジュールをキャンセルするという意味）にしてくれないみたいな感じになって。「はあ？」みたいな、もう明日は行かないからみたいな、そんな感じのけんかとかをしながら、「何を言っているんですか」みたいなことをやりながら、本当にいまの高知さんがあるんだなというように思っているんですね。

高知 そうだよ。仲間とつながり続けながらも、プログラムをやりながらも、でも、やっぱり捕まるまでの五十何年の思考、ゆがんだ認知は、すぐに、はい、変わりましたとなかなか難しい。

そういったところに、やっぱり自分のきつこうじゃないか、こう思っているんじゃないかという妄想、思い込みというのが、仲間の影響や、もちろんこの人の影響も大きいんですけど、やっぱりいまではもうほとんどなるようになるよと。



対談の様子⑤

でも、まだそういうので自分が怖かったり、こう思っているんじゃないかという、とにかく自分が勝手に作り上げる妄想に苦しんだ時期もあったよね。

田中 やっぱりあれだけのバッシングを受けた経験というのは、すごく次の失敗とかが怖くなっちゃうということなんですか。

高知 怖くなる、なる。いまだにやっぱりフラッシュでパシャパシャ撮られると、やっぱりすごく嫌なもの。

田中 それはトラウマ的なものだと思うんですけど、でも、芸能界にいたときに、作品に対して、やってみなきゃ分からないとか、役作りってどうなるかとかいうことで、そんなに一步踏み出すのに怖いなんてことはなかったと思うですよ、もう何十年もやって。

高知 違う怖さがあった。やっぱりもう僕も二十何年役者をやらせてもらって、だんだん年月が行くと、完璧じゃなければいけないというものが当たり前ようになって、気が付くと、周りもこれでいいのかよという不安がありながらも、監督とかプロデューサーが「OK」と言うし、「えっ、OK」「もうOK」、そうかという、なんかそういう不安というものもあるから。でも、そこにとらわれていた自分というのがあったので、いまはもう本当に仲間のうれしい言葉で、「完璧じゃなくていい、最善を尽くせばいい」と。こうやって言葉を言うだけで、すごく楽になっていたり、本当に仲間から教えてもらって、同じことが起きて、どの言葉を使うかで、こんなに違うんだなというような学びになっているから、日々。

田中 じゃあ、バッシングされて、新しい仕事をやることに、もうすごくプレッシャーがあって、行くの、行かないの、今日はやっぱりやめるみたいな、ああいう騒動になりましたけど、もともとはすごく完璧主義で、失敗が怖いタイプだったんですか。

高知 そうですね。だから、人よりもやっぱり台本を読み込んだし。人によっては、1、2回見ただけで覚える人もいるけど、僕の場合はやっぱり時間がかかる人間だったから。

なぜかと言うと、やっぱり完璧で、監督に求められて、それ以上の結果をと、自分たちは何個も引き出しを持って、その中で、監督は「その芝居、いいね。それでいきましょう」とか言ってくれ



対談の様子⑥

話し合っ折り合いをつけることが不慣れ

高知 そう。そのときは、もう二兎を追う者は一兎をも得ずということで、やっぱり芸能界からちょっと休んで、「健康産業に力を本気で入れたい」ということを言ったら、マスコミが勝手に「親の介護で引退」と。何だよ、それって。

もうそんな十何年前から、結婚した2、3年後から介護はやっているわと。そのときは女房と、世間には悪く言っていないから放っておこうかと。またこの放っておこうかというのもよくなかったんだろうね。

田中 高知さんは、そういうのがすごくある。

高知 ある。

田中 ここでちゃんと手を打たないと、火種が小さいうちにちゃんと手を打たないと駄目ですよというのがある。

高知 確かにね。

田中 あまりその手の打ち方が分からないんですよ。

高知 分からないもの、うん。

田中 なんか近い人に八つ当たりしているみたいな、そんなところがあるんですよ。

これはまずいから、ちゃんとこのようにやって交渉しましょうみたいなところというのとかも、たぶん小さい頃というか、なかったんでしょね、経験の中でそういうのが。

高知 小さいころから親でもいい、おじさん家族でもいい、自分が子どもなりに正しい、間違いじゃなくても話を聞いてくれる時間という環境がなかった。

我慢をしていたから、僕には結局話し合うことや、人の話を聞いて、あ、そういうこともあるかという時間がない、生きてきた中で。

自分の中で見てきた大人というものは、当時で言えば、親父のことを守る、組を守るためにヒットマンで、命を懸けて行くわけです。そうしたら、明るく日には遺灰になって、おふくろの前で親父は、若い衆の前では見せない涙を流しながら、おふくろが慰めているのを見たりすると、勝つか負けるか、生きるか死ぬかというものを教えられたわけではないけど、子どもながらにそういうのを見てしまうと、なんかやっぱり。

るから、だから、もう完璧が当たり前。そうでなかったら、こんなめちゃくちゃな、はちゃめちゃな僕でも二十何年役者で飯を食えないですから。

田中 ううん。まあ、だから、完璧主義が自分を苦しめていたということですね。

高知 いやあ、もうそれもでかいです。

田中 もちろんすぐクオリティーが高くないと、役者として生き残れもしない。だけど、完璧主義ということが自分を苦しめてきたし、だからこそ、なんか一回俳優を辞めてみようと思ったということは、完璧主義が結構プレッシャーだったということもありますよね。

田中 なんかそういう、うまくいかなかったことを調整するとか、話し合っ折り合うところを見つけるとかというのが、全然経験がなかった感じですよ。

高知 うん、ない。だから、薬物ではなくとも、そういう自分の弱さを見せるのがかっこ悪い、男として恥やとか。特に、また男たるもの、女たるもので、皆さん、土佐の高知はいまだに田舎だから、根性論で男とはみたいなものが、まだいまだに根強くある中で、僕は普通の環境と違って任侠の環境だから、さらに30倍ぐらいありますよね。

田中 高知さんの周りのお友達が、みんな元ヤンキーみたいな人がいっぱい。友達と飲みに行くと、息子さんの話とかになって、「うちの子も不登校なんだよ」とかと言って。

そうすると、周りのお友達が、「そんなもん一発ぶん殴って連れていけ」みたいなことを言っているから、いやいやいや、それはいつの時代の話なんだみたいな。

高知 「不登校なんだよ」と言う、俺の友達自体、親は警察官と教師ですよ。なのに、あんた自身も高知で有名な不良だったやんみたいな。その子どもが不登校なんだよって。

田中 そういう環境の中で育ててね。

高知 そう。



対談の様子⑦

本当の愛情深い母の姿を知る、そして仲間への感謝

田中 あとは、私が出会ったときに、高知さんにすごく伝えたいなと思っていたのは、やっぱりお母さんが自殺されているということから、母親はいつまでも女でいたかったんだと。母親でいるよりも女でいたかった人なんだということを最初からおっしゃっていたんですね。

私は、それは違うのではないかなとすごく思っていたし、話を聞いていて、確かに破天荒で、ファンキーなお母さんなんですけど、でも、節々で高知さんを守ろうとしていたというエピソードがたくさんあるんですね。

例えば、やくざの組にいて襲撃されたときに、高知さんを守ろうとして、後ろから敵が、高知さんがいる2階に上がっていきこうとするところを、仁王立ちになって、お母さんが背中からぱっさり切られちゃったとか。

あとは、高知さんが明德にいたときに、友達にリンチみたいな

のに遭ったときに、入院することになったんですね。入院したときに、加害者の生徒がみんな菓子折りを持ってお見舞いに来たんで



対談の様子⑧

すね。そうしたら、お母さんがそこにあったモップで、加害者をみんなぶん殴ってしまって、その子たちが今度は入院する羽目になるみたいな、そういう話を聞くと、ものすごく愛されている人だなと。

確かに、やり方はへんてこりんだけど、ものすごくお母さんは愛情深い人だったから、女でありたかったという高知さんの認知はゆがんでいるのではないかなというのは、すごく思っていたんですね。

高知 そのときは、本当にそのように思っていたんですね。でも、それを逆に、俺は親に恵まれなかったから見ておけよ、俺の代から成りあがって作ってやるぞというパワーにもなった。

近頃おふくろのルーツを、リコちゃんと田舎に戻って調べたときに、あらためて、おふくろは普通の人とは違って、育て方というのが分からなかったんだと。でも、おふくろなりに一生懸命俺を愛してくれていたんだというものが本当に分かると、またこれは薬物とは違って、自分の心がすごく楽になった。

田中 高知さんの母の認知を変えようと思って、私が一応提案して、高知さんの戸籍をさかのぼったり、お母さんのルーツを探りましょうということをやったんですね。

最初はすごく嫌がっていて、最初の戸籍を取ったときとか、また渋谷区役所で、もう飛び出してしまうみたいな感じで、もうすごい嫌だったんですね、そういうことをやるのが。

でも、そうやってお母さんのルーツをだんだんたどって、いろいろな証言を聞いていくんですね。もう身内が全然いないから、数少ない伝手をたどって行ったときに、「いや、あなたのお母さんはいつも丈二君を連れて、すごくお母さんらしくお食事していたわよ」とか、「本当にいつも丈二のためにと言っていたわよ」とか、「丈二においしいものを食べさせたいと言っていた」と。

「あなたにとって、お母さんは本当に愛していたし、誰よりも一番思っていたのは丈二君なのよ」という証言をいろいろ聞くことができたんですね、高知の、いまだに生きている人たちに。あれは、私は本当に感動したし、すごくやってよかったと思ったんですね。お母さんと仲のいいお友達とかに、偶然なんですけど会えたときとかすごくうれしかったんですね。

高知 そうですね。自分はそれまでは毎晩酔っぱらっていたから、先ほど話したように、酔っぱらって帰ってくるなど。でも、おふく



対談の様子⑨

ろは俺を、他のところよりも普通じゃないから、うまいものを食べさせたい、いい服を少しでも着せてあげたいということで、飲めない酒を一生懸命飲んで、ホステスさんで、自分は頑張ってるってやっていたということをや、やっぱり違う角度から聞いて、ああ、そうかと。

それまでは、もうリコちゃんが言ったように、おふくろという前に、子どもを勝手に自分で産んでおいて、子は親を変えられないんだ。親はぼんぼん子どもを作ることができるけど、ふざけんじゃねえと。なんかそう思いたくないけど思い込んで、自分しかない残りの人生をどうやってパワーに変えて生きていくかって。

もう他は見たくないということにも突っ走っていたから、いまあらためてこうやって仲間と出会えて、自分が勝手につくり上げた絡まった糸を、僕一人では無理で、こういうやっぱり先行く仲間たちが一緒になって一つ一つほいてくれて。

その真実というものが一個一個やっぱり分かっていったときに、ごめんなさい、ちょっとまたこういう話になると、俺はまた思い出してしまって涙が出そうになるけど、おふくろは精一杯、不器用だったけども愛してくれていたんだということと思うと、一度しかない、残りの自分の人生を本当に大切に。

僕は、もう目標とか夢なんかはやめて、いまあるもの、いま自分にとって必要としてくれるところに最善を尽くして、今日という日を大事に、思い切って楽しもうという積み重ねが、今日という日をまたこうやって生んでくれると。なんかもうありがたくて仕方がないんだよね。

当事者同士のサポートを高知さんにバトンタッチ

田中 でも、本当に私と高知さんがこのようにけんかをしながらもやってこられたのは、やっぱり私自身も同じ経験があって、さらに、私も父親が会社の金を横領して首になっているようなギャンブラーだという、そういう自分もこのプログラムを通じて自己開示をして、高知さんに全部伝えた。

そして、自分がやってもらったピアサポートですね、当事者同士のサポートを今度は高知さんに手渡したという。

これが、たぶん私、支援者とか先生とかに言われていたんだしたら、うまくいかなかったと思うんです。

高知 いや、そうですね。もう俺がやっぱり降参したわけじゃないけど、この人を信じようと思ったのは、やっぱり経験。

田中 ですので、当事者同士で再生していくピアサポートの力というのを、多くの人たちにも知っていただきたいし、やっぱりあん

なことをやった奴が何を言ったんだという声が、まだまだ日本の社会は多いけど、そうじゃなくて、あれだけの経験をくぐり抜けて、きちんと自分に向き合って回復の道を歩んだ人たちが、それをまた同じ人たちの解決策に生かそうとする。こういうピアサポートの力というものを日本の中にもっと広めていきたいし、皆さんにもそういう力を信じていただけたらなというように、今日ももうそろそろお時間になっちゃっていますけれども。

高知 そうですね。

田中 そういうことが今日伝わったら、すごくありがたいなと思っています。本当にいつも私たちがなんかだらだらしゃべってしまうんですけども、こんなお話を今日はさせていただきます。

高知さんの方で、最後に何かあれば一言。

ラストメッセージ

高知 えっ。いや、もう僕はもう言葉は十分話しました。ただ、本当に僕一人ではいまいない。仲間の支え、応援、そういったものによって、皆さんが僕を見て判断してください。回復し続けているか、こいつ、本当かよと思うか。なぜなら、先陣切った人も、何回も捕まる人もいます。でもいいんです。でも、その人たちを僕らはいつでももう一回受け入れて、僕みたいに仲間によってまた笑顔を取り戻して、自分らしさを取り戻してもらえよう頑張っていきたいと思うし、本当に。

田中 ぜひ、本当に今度はサポートする側に高知さんが回れたら、そういうご縁があるといいですね。

高知 そうですね。まだまだその壁は甘くはないですけど、とにかく自分は自分を大事にして、そうすることが人にもやっぱり大事にできるということ。

僕は、まだいろいろなことを学んでいる最中です。だから、いま僕はこうやっています。来年、再来年、皆さんにどうやって自分の報告ができるかを楽しみにしてもらえたらと思います。とにかく僕は幸せに生きます。

田中 ということで、ありがとうございました。
(会場から拍手)

第12回 矯正・保護ネットワーク講演会開催案内

主催：龍谷大学矯正・保護総合センター

参加費無料

要事前申込

先着150名様

※新型コロナウイルス感染予防のため今年度も参加人数を150名に限定させていただきます。

テーマ

人にやさしい社会を目指して ～Chance!!がつなく刑務所と社会～

2022年12月10日(土)

13:30～15:00(開場 12:30～)

龍谷大学 ^{きょうと}響都ホール 校友会館

(京都市南区東九条西山王町31 アバンティ9階)
JR京都駅八条東口より徒歩約1分



■ 講演

みやけ あきこ
三宅 晶子氏
(株式会社ヒューマン・コメディ代表取締役)



>プロフィール

1971年、新潟県生まれ。中学時代から非行を繰り返し高校を1年で退学に。地元のお好み焼き屋に就職していたときに父からもらった1冊の本をきっかけに大学進学を志す。早稲田大学第二文学部卒業。貿易事務、中国・カナダ留学を経て株式会社大塚商会入社。2014年退職後、人材育成の仕事がしたいと思い、生きづらさを抱える人を知るため受刑者支援団体等でボランティアをおこなう。その活動中に非行歴や犯罪歴のある人の社会復帰が困難な現状を知る。2015年7月株式会社ヒューマン・コメディ設立。受刑者等を雇用する企業の採用支援・教育支援をおこなう。2018年3月、日本初の受刑者等専求人誌『Chance!! (チャンス)』創刊。アンガーマネジメントファシリテーター。依存症予防教育アドバイザー。

参加お申込み

参加をご希望される方は、事前にお申込みが必要です。

インターネットから

- ①矯正・保護総合センターホームページ(<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>)の「講演会等のお申込み・資料請求」ボタンをクリックしてください。
- ②「お申し込みフォーム」の必要事項(名前・住所・メールアドレスなど)を入力し、内容確認後、送信ボタンをクリックしてください。
登録されたメールアドレスに受付完了メールを返信いたします。

FAXから

以下の参加申込書に必要事項をご記入の上、送信してください。

お問い合わせ

龍谷大学 矯正・保護総合センター

TEL:075-645-2040 FAX:075-645-2632

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内

<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>

E-mail: kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp

2022年12月10日 第12回矯正・保護ネットワーク講演会参加申込書

フリガナ						当てはまるものに○をしてください。
お名前	〒	ご住所	電話番号	FAX番号	メールアドレス	年齢
						10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上
			FAX番号		ご所属・ご職業 (差し支えなければ)	



075-645-2632

研究活動紹介

「刑罰理論研究プロジェクト」の研究活動について

本プロジェクトは、アウクスブルク大学のHenning Rosenau 教授（現ハレ大学）と共同で開催されたシンポジウムをきっかけに立ち上がりました（当該シンポジウムの成果は金尚均・Henning Rosenau編『刑罰論と刑罰正義—日本 - ドイツ刑事法に関する対話 日独シンポジウム（龍谷大学社会科学研究所叢書）』（成文堂、2015年）として公表されており、さらにドイツ語版も出版されています）。

本プロジェクトにおいては、現在、二つのプロジェクトが進められています。一つは、異文化と刑法に関する研究であり、もう一つはヘイトクライムについての研究です。前者の研究は、例えば、外国で自己が所属または内面化している文化規範に従い行為したところ、この行為が当該外国の規範に反するものと評価される場合、しかもそれが通常であれば犯罪と評価されるような場合を、刑事法上、どのように評価すればいいのかという点につき刑事法学のみならず様々な学問上の知見を参照して考察することで、最終的に刑事法という法システムの意味・意義及びその限界を明らかにすることを目的としています。もっとも、現時点では、ドイツ刑法学の知見に基づいて研究を進めるべ

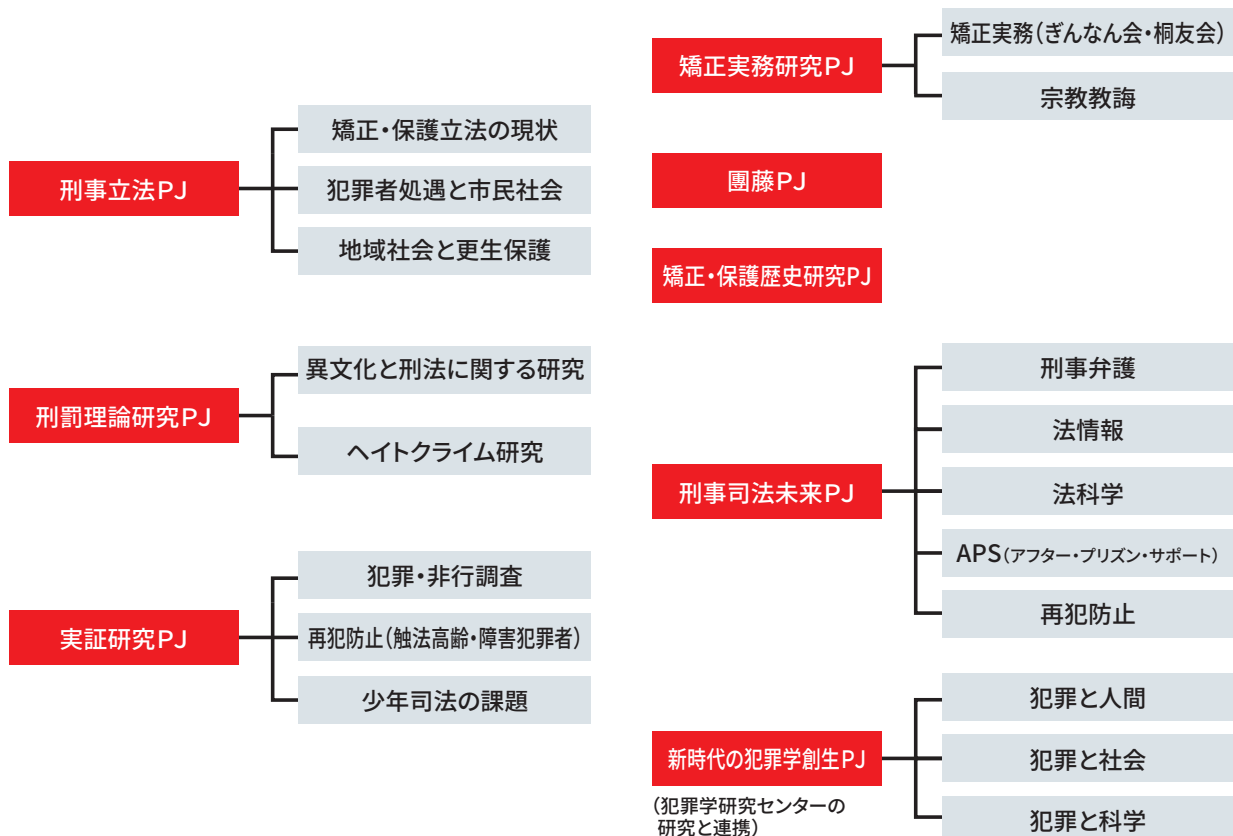
く、その準備作業として、ドイツの著名な刑法学者であるWalter Gropf教授の刑法教科書の翻訳をしております（その成果は、「龍谷法学」において公表されています）。

次に、ヘイトクライムに関する研究ですが、本研究はもともと、京都にある朝鮮学校への襲撃事件を契機として立ち上げられたプロジェクトです。当初の研究目的は、ヘイトスピーチとは何かにつき明らかにすることで、その限界を明確化すること、その際、個人の名誉に対する毀損とは異なる害悪を明らかにすることで、ヘイトスピーチに対する具体的な対策を構想することを課題としておりました（この点については、様々な媒体で研究成果が公表されております）。さらに、近年では、人種差別撤廃条約加入に伴う国内法的措置の一環として人種差別的言動に有効に対処できる立法措置を講じるべく、そのための様々な規制手法を考案することを課題として研究を進めています。

刑罰理論研究プロジェクト代表

玄 守道（龍谷大学法学部教授）

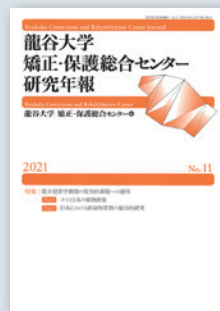
2022年度 矯正・保護総合センター研究プロジェクト



新刊情報

『龍谷大学矯正・保護 総合センター 研究年報 第11号 2021年』

[編集発行者]
龍谷大学矯正・保護総合センター
[発行所]
株式会社現代人文社
[発行日]
2022年2月28日発行



ISBN978-4-87798-795-4

『矯正講座 第41号 (2021年)』

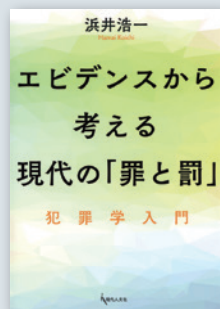
[発行者]
龍谷大学矯正・保護課程委員会
[編集者]
「矯正講座」編集委員会
[発売所]
株式会社成文堂
[発行日]
2022年3月18日発行



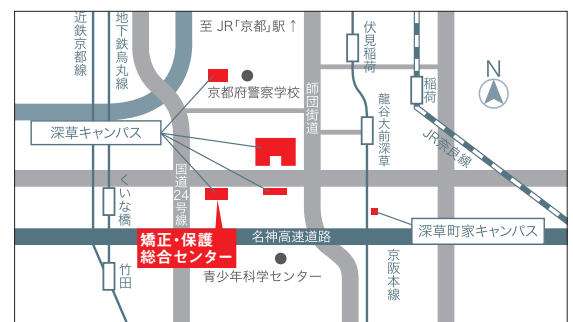
ISBN978-4-7923-3419-2

『エビデンスから考える現代の 「罪と罰」 犯罪学入門』

[著者]
浜井浩一
[発行所]
株式会社現代人文社
[発行日]
2021年12月25日発行



ISBN978-4-87798-785-5



龍谷大学 矯正・保護総合センター

- 京阪「龍谷大前深草駅」下車徒歩約8分
- JR奈良線「稲荷駅」下車徒歩約13分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋駅」下車徒歩約5分

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内
Tel.075-645-2040 Fax.075-645-2632
URL <https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>
E-mail kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp